

## 初近代イギリス文献におけるヤエル像

——『土師記』受容史の考察——

瀧澤 英子

### 序論——「ヤエルのバター」の浸透——

一九四八年一月三日の夜、BBCラジオ局は『ミステリー劇場』シリーズの初回として、『呈進の皿のバター』(Butter in a Lordly Dish)という題の戯曲を放送した。この番組は当時人気の推理小説家たちによる書き下ろしの小品を各回完結型で提供するものであった。午後九時半からの三〇分間という放送時間枠から、高い視聴率を見込んだ企画であったことがうかがえる。その柿落としを任されたのが Agatha Christie である。

この戯曲の題名は旧約聖書『土師記』第四、五章に記された物語に由来する。その第四章に綴られているのは、イスラエルの民が異教を奉じる他部族とヨルダン川以西の地域をめぐって争っていた時、ヤエルという女性がとった行動のために、戦局が好転し大勝利に導かれたという伝説的な事件である。さらに続く第五章では、女性士

師デボラによる頌歌として、戦勝に至るまでの顛末が改めて語られる。ヤエルは味方とはぐれて道に迷う敵將のシセラを自らの天幕に招き入れて歓待する。そして相手がまどろんだ隙に、その脳天を槌と大鋌で打ち砕く。この時、もてなしに“the lordly dish of butter”が供された、と書かれている。(Judges 5: 25)

ヤエル伝説を下地にクリステイが描いたのは、若い女性が殺人罪で死刑を宣告された情夫の復讐を遂げる劇である。<sup>(1)</sup> 仇討ちの標的となった法廷弁護士エンダビー卿に同じく、聴衆は結末まで真相を知らされない。しかし『土師記』の一節を借用したこの題名は、エンダビーの前で魅力的な愛人としてふるまうジュリアがまもなく彼に身の破滅をもたらすことを暗に伝えたであろう。現にこの戯曲は、題名のほかにも台詞の端々に「呈進の皿のバター」の文言を採り入れている。ジュリアがエンダビーを食卓に導きながら、二人の晚餐用に“butter in the lordly dish”も準備してある、と言うのを聞いた時、多くの視聴者は何も気づかぬエンダビーに歯がゆさを覚えたらう。終局では、睡眠薬を盛られ朦朧となったエンダビーがジュリアの口から彼女の正体、すなわち、つい先頃、自分が訴追した事件の被告人と内縁関係にある女性であったことを知らされる。死刑判決の決め手となったのがエンダビーの弁論であった。意識が薄れる中、エンダビーはシセラがとどめの一撃を受ける瞬間を描いた『土師記』の一節を唱えながら、ジュリアが近づいて来るのを見る。女の不気味な高笑いで劇は幕を閉じる。

ラジオ向けの戯曲を執筆するにあたり、Christieは“the lordly dish of butter”の文言を効果的に用いている。言うまでもなく、二〇世紀初頭は電波放送が飛躍的に普及した時代である。イギリスでは一九三六年にテレビ放送も開始しているが、ラジオは依然として、国民一般に情報と娯楽を提供する主要のメディアであった。Christieのラジオドラマが、このような幅広い受容層を想定して配信されたものであることを考えるなら、“the lordly

dish of butter”という表現もまた、これを耳にした視聴者の多くが、本性を隠しながら標的に忍び寄る悪女の姿を思い浮かべられるという効果に期待して台詞の中に配置されたと思われる<sup>(2)</sup>。

これとは対照的な例が、A. S. Byattの自伝的な短編小説「ヤエル」(“Jaël” *Elementals*, 1998)である。作中、語り手は、自分の母親が台所でバターを手にする時には、決まって“the lordy dish of”の文句を戯けた調子で口にしていたと回想している。Byattは一九三〇年代の生まれである。この作品が作家の実体験に基づいているのであれば、ちょうど前述のラジオドラマが公開されたのと同じ時期に、母親とこのような会話を交わしていた可能性が考えられる。Christieは、悲劇的な結末を仄めかす謎めいた文句として、Byattは母親の日常的なふれあいを偲ばせるものとして、それぞれ「ヤエルのバター」に触れている。このように全く異なった文脈における言及例から、ヤエルの名、及びに彼女がシセラに差し出したとされるもてなしの食事は、20世紀半ばのイギリス国民になじみ深く、またその汎用性も高い文言であったことがうかがえる。

実に『士師記』第四章、五章にわたって記されたヤエルのエピソードは、英文学作品に頻繁に登場する。ヤエルの名や『士師記』の該当部分に言及する事例は、筆者が把握する限りでも、一五世紀半ばを皮切りに二〇一八年まで総計一〇一件にのぼり、そのうち、ヤエルのもてなしに言及するものが半数近く、さらに「バター」に特化した記述は一六件を占めている<sup>(3)</sup>。このことは、それぞれの書き手達自身が本エピソードを知っていたことを示す以上に、そもそもヤエルの名や、彼女がシセラに供した食事について断片的に触れるだけで、それが一体何を指しているかを理解できる受容層が一定数存在することを見込んでこそテキストに書き入れられたという状況を示唆している。さらに、後に挙げる例にもみられるように、「ヤエルのバター」が話題にされる時、それ自体に説明

的な叙述は付されず、むしろ別にある本題を明確にし、説得力を与えるための手段とされている事例が少なくない。このような論拠や比喩といった副次的に扱われる頻度の高さから察しても、本エピソードがイギリスにおいて共有の知として広く浸透していた可能性は高い。

二〇世紀初めまでには英語文化に広く普及していたと思われる、“the lordly dish of butter” といひ言い回しは、いかなる過程を経て導入されたのだろう。聖書中の一エピソードや、そこに登場する特定の人物に焦点をあて、その受容状況を詳らかにする作業も、聖書伝播史の構築にささやかな貢献とできるのではないか。本稿では、古典作品の翻訳が飛躍的に進んだ初近代イギリスを射程とし、ヤエルの人物像、とりわけ彼女がシセラに与えた響応が、文学作品の中でどのように扱われてきたかを検証する。出版文化の隆盛にともない、古典語の素養をもたない読者も含む、より広範な層に急速に浸透したこの時期に、本エピソードが英語に訳され、あるいは作品の中で言及されることにより、それぞれの文脈においていかなる側面が切り取られ、新たな意義付けが施されているのかを分析する。ヤエルとシセラの対決、彼女の選んだ方策、及びにもてなしに差し出された「バター」は、武勲称揚から悪女論に至るまで、幅広い見地から語られている。

英文学の分野に限定されず、ヤエルの人物像は、多様な観点から異なる意味合いを託されながら語り継がれてきた。彼女は、イスラエルを危機から救った英雄として称揚される一方、時として冒頭にあげたラジオドラマの例が示すように、勲功に資する人物とはかけ離れた、悪女の典型とも認識されている。本論は、ヤエルの人物像が伝統的に両義的な性格を負わされてきたという点に注目したい。『士師記』でのヤエルは、シセラ殺害によりイスラエルの国体保持に貢献したという点でまずは高い誉れを受ける。しかし、この手柄が敵の意表を衝く、い

わば正道でない手段によるものであることから単純に是とされない。飲食や安息の場を提供することで歓待のそぶり示し、敵を十分に油断させた上で殺害に及んだというその手口から、ヤエルは二面性を孕んだ不吉な女性のひな型ともされてきた。

旧約聖書は他のエピソードにおいても、イスラエル史上の事件で重要な役割を果たしたとして、表と裏の顔をもつ女性達を登場させている。エステル (*Esther*) やデリダ (*Judges 15*)、ヘロディアの娘、通称サロメ (*Mark: 14:29, Matt: 14:12*)、及びユディトがこれに相当する。統治者や武人といった有力な立場にある男性に近づき、相手の目を欺きながら目的を果たすという方策は似通っていないながら、その評価については二極に分かれる。エステルとユディトは、イスラエルを危機から救済した存在として記憶される一方で、残る二人は男性たちを惑わし、破滅に導いた悪女の代名詞までになっている。女性の二面性が語られる時、その評価も二つに割れるのである。

一義的には、イスラエルの救世主であるヤエルもまた、この女性の二面性をめぐる議論の的となる。『士師記』の文脈では貢献者であるにもかかわらず、彼女の名は、矛盾や欺瞞に満ち、捉えどころがなく、結果的に不利益や害悪を生み出すものの代名詞に使われている。結果としてヤエル像は、曖昧さを孕んだ存在として語られてきた。以下、ヤエルをめぐる不透明性が各文脈においてどのように取り扱われているかに注目していきたい。

## 一、「女性論争」の中で

初近代イギリスにおけるヤエル像の受容を知る手がかりとして、まず、「女性論争」(*Femme de Querelle*)と呼

ばれるジャンルに目を向ける。「女性論争」は、出版文化の誕生まもない一五世紀のヨーロッパで発生した文芸運動であり、聖書や神話、そして歴史上の事件に登場する女性たちを例に挙げながら、女性の本質や、その理想的な在り方を議論するというものである。「女性論争」の原点は、Christine de Pisanの『婦女の都』(*Le Livre de la Cité des Dames*, 1405)とみられているが、後程なくヨーロッパ各地の言語圏に伝播し、イギリスでも、二〇世紀に至るまで、各時代の世情を反映しつつ勃興期をくり返している。

「女性論争」に限らず、ルネサンス期の西洋で寓意啓発的な意図をもって書かれた文芸作品の多くは、様々な人物を列挙するという特徴がある。ヤエルの名が載るイギリスの出版物としては最初期のものと思われる John Lydgate 作『君子達の終焉』(*Fall of Princes*, 1494)、及びに Stephen Bateman 作『苦悩の巡礼』(*The Tranyyled Pilgrim*, 1569)の両方がこの型を採っており、それぞれ前者が底本である Boccacio の『名士達の運命』(*De Casibus Virorum Illustrium*, c. 1355)、そして後者が Olivier de la Marche の『意志堅き騎士』(*La Chevalier Delibere*, 1483)から、この形式をそのまま引き継いでいる。文学作品においてヤエルに言及すること自体が大陸由来の伝統を受けたものであり、また人物を比較対照しながら語るという形式と共に導入されたという事情は、イギリスにおけるヤエル像の受容史を考える上で重要である。なぜならこのような枠組みの中で、ヤエルは好ましがき人物群のひとりとして語られる一方で、悪しき例にも挙げられているのだ。

女性論争がイギリスで隆盛を極めたのは一六世紀半ばから一七世紀初頭であり、女性を肯定、ないしは否定的な立場から論じた文献は、現存するものだけでも総計三六点確認されている。その多くが神の摂理の正当性を説く、あるいは道徳的な教化をねらいとする傾向がみられる。この文脈においてヤエル像の矛盾は、一方では神の

栄光に浴した誉れ高い女性、また他方では人の目を欺き災いをもたらす女性という、全く相反するふたつの姿に切り取られる。

イギリスの作家が書いた「女性論争」の作品のうち、おそらくヤエルへの言及として最初期にあたるのは、Edward Gosynhill 作『遍く女性への賛美』(*The Praise of all Women*, 1542)である。「女性論争」で、『士師記』第四、五章を扱う場合、多くはデボラが士師として發揮した指導力に焦点をあてる。Gosynhillもこの伝統に倣い、デボラを称える章の中で、ヤエルの名に言及する。

ヤエルという名のエベルの妻は、横たわって寝入るシセラを惨殺した。神はその女性に力を賜ったのだ。か弱い女により多い誉れを、そして男性には何も授けなかった。

これと酷似する記述が、Gosynhill 作品の出版から二〇年後に、C. Pyre と名乗る著者により発表された『女性の礼賛と非難』(*The Praise and Dispraise of Women*, 1569) に認められる。題が示すとおり、この作品は、女性に向けた称賛と非難の詩の対称的なふたつの部分から成り、デボラとヤエルの物語は、その前半部、つまり賞賛されるべき例のひとつとして収められている。女性論争作品集を編纂した Pamela J. Benson は、当時の出版市場において、既に公刊済みの作品内容が数年後に、題や著者名のみ挿げ替えて別書籍の態で出版されたり、また、一部がそのまま新たな作品の中に、断りのないまま組み込まれたりすることが横行していたという実情に注意を促している。言うなれば、人物例や話題にされる伝承のみならず、叙述そのものの再利用がほぼ際限なく行われて

いたということになる。

この状況下で、とりわけ Gosynhill の作品はさらに特殊な事情をもつ。『遍く女性への賛美』は、一年前に発表された作者不詳の『女性たちの学び舎』(The *Schoolhouse for Women*, 1541?) という、女性の移り気を批判する作品への反駁と位置づけられている。ところが近年の研究では、双方の作品が相互に言葉を引用し、非難し合っているという内的証拠が認められることから、話題性で書籍の売り上げを伸ばそうとした出版業者と結託した Gosynhill が、両作品を書いたとする見解が有力である。

ヤエルは、このような出版事情の中、文字通り使い回された人物像のひとつである。実際、女性否定論の類に属する著書の中にも、ヤエルは登場している。Pyre や Gosynhill と同時期に出版された『あらゆる女性の虚偽』(The *Deceit of all Women*, 1568 作者不詳) には、次のように綴られている。

敗走中の彼は、ヤエルという女に出くわし、「どうぞわが家にお越しになり身をお隠してください」と声をかけられたので一緒に行った。(シセラは)喉がとても渴いていると伝えると、ヤエルは急いで乳を与えた。疲労困憊していたシセラは眠りに落ちてしまった。するとヤエルは、大釘を手に取り、彼の頭部の頂きに据え、その頭を釘で割り、殺してしまった。イスラエルの全勢力が打ち負かすことのできなかつた主将を、たったひとりの女が策略だけで征服したのだ。

Gosynhill や Pyre とは対極的な見地に立ってはいるものの、シセラ及びデボラの行いが女性として全く異例



のものであると捉える点において、共通点もみられる。

女性を肯定的に描く Goshynhill (及びに、その記述を転用したと思われる Pyre) の作品においても、ヤエルの手柄を、女性が成し遂げたものとしては、高く評価している。しかし Goshynhill が最大の賛辞を贈る対象は、あくまで士師デボラの功績であり、ヤエルはこの援護者として認められるにとどまっている。言い換えるなら、天の声を聴き取り、窮地に陥ったイスラエルの民を奮い立たせ、進むべき道を教えたのは他ならぬデボラであり、ヤエルはその実現を助けたに過ぎない。当然ながら、このような体系の頂点に位置づけられるのは神である。つまり、ヤエルは荣誉に浴した女性ではあるものの、それもひとえに、デボラを介して与えられた神の意思を実行する者として選ばれたという点においてなのである。

引用末における、「神が男性よりも女性をひいきにした」との見立てについても、二人の女性に高い評価を与えるというよりは、戦役において女性が活躍したという事態の異例性を強調するものと考えられよう。つまり、ヤエルと、彼女がしとめたシセラの間で生じた男女間の力の逆転を、デボラとイスラエルの司令官であるバラクの関係に類比させているのだ。軍を統率する身でありながら戦績を残すことができなかったバラクは、当初はデボラの助言を軽んじていたものの、結局はその預言に導かれて敗北を免れた。シセラもまた異教徒として、神の意思に背く存在であったからこそ非業の死を遂げた。ヤエルの偉業が驚きをもって語られるも、その一方でこれは個人の力で成し遂げたものではなく、あくまで神の意向のものでこそ導かれた結果として語られる。彼女の手柄は、神の摂理を成す一部として捉えられ、その秩序を補強し維持することに貢献したという点において、賞賛されている。このように、称賛のテクストにおいてさえ、ヤエルの誉れは、神の栄光という前提の条件の上に構

築されているのである。

## 二、勇士ヤエル

一六世紀末のイギリスにおいて、ヤエルの人物像にはより特化した意義が与えられるようになる。聖書や神話に登場し活躍的な役割を果たす女性たちは、現君主として国を統率する女性、つまりエリザベス一世の表象として、頻繁に用いられるようになるのだ。

例えば、William Averille による『驚異の対決戦』(*A Mervallious Combat of Contradictories*, 1588) は、シェイクスピアの *Coriolanus* (c.1608) の中に登場する「胃袋の寓話」の材源として知られる作品であるが、発表されたその年に、イギリスがアルマダ海沖でスペイン無敵艦隊と交戦したという、時事的な背景と深く結びついている。果たしてその後半部では、自国の直面する危機が打破されるよう神に向けた祈願体による詩が綴られる。

我らの耳には日々、福音の鐘が鳴り響き、迷信や罪は教会より追いだされ、我らは汚れなき心であなた（神）に仕える。あなたは、信心深く、徳高く、慈悲に満ちた女王を我らに賜った。イスラエルのデボラのごとく国母でありつづけてきた女王を、どうか、シセラを退けたヤエル、ホロフェルネスをしとめたユディト、または傲慢なハモンを説き伏せたエステルに比肩しうるものとしてください。（“To All True English heartes, that love God, their Queene, and Countrie.”）

Averlie は、対スペイン戦にカトリックの征服という宗教的な大義を与える。そしてイギリスの勝利を、神の摂理に適うものと位置付ける。この宗教的な闘争の正当性を裏づけるものとして、ヤエルの物語が選ばれているのである。Averlie は、エリザベスの存在を、何よりもまず「イスラエルのデボラのごとく国母でありつづけてきた」と語り、続いて、ヤエルやユディト、エステルに授けられた力が、女王にも与えられるよう神に祈る。つまり、これらの女性たちの中で、女王の姿を象るものとしてはデボラが上位を占め、後の三名は女王に与えられるべき強さの持ち主として引き合いに出されている。つまり、ヤエルの物語を包含する『士師記』第四、五章のエピソードそのものが他を凌いで、カトリック勢力との対立関係を描くのに相応しい枠組みを提供するものと見なされているのがわかる。

イギリスがスペインから侵略の脅威に曝されていた時期に、事態の好転を願って書かれた作品の中で、エリザベスがヤエルに重ねあわされる時、国の命運を託された護国の戦士として描かれている。なお、女性士師像の名に借りたエリザベス表象には、常に両義的な性格がつきまとう。Alexandra Walsham、A. N. McLaren、Carol Blessing 等による研究が証明するように、力を行使する女性像のイメージのとり女王を称揚する一方で、女性が主導権を掌握するという状況の異例性を強調し、時には下地とする物語を巧みに操りながら、女王の権威を牽制しようとする意図さえ認められる。

Averlie 同様、エリザベスをヤエルと重ね合わせることで、扇動的な効果を狙った例として、Roger Cotton（生没年不詳）の作品がある。シユロプシャーの織物商であった Cotton は家業の傍ら詩作に励み、一五九〇年代に三

点の詩集を出版した。同郷の神学者 Hugh Broughton (1549-1612) を師と仰ぎ、彼から伝い受けたと思しき、聖書に現われる文言やエピソードを、自作にふんだんに取り入れて<sup>(1)</sup>いる。

Cotton は、宗教的理念を拠りどころとする愛国精神を高らかに謳う。彼の詩はしばしば聖戦のイメージャリーにのっとり、英国の繁栄をこそ神の意志と定め、これを阻むいかなる勢力にも抗うよう読者を鼓舞する。一五九六年の作品『聖歌』(『Spiritual Song』)は、「搖籃期から現代に至る史実談とともに」という副題が表すように、聖書や神話からの様々なエピソードを列挙し、過失や成功に習うという態で、自国の針路を提示する。なお同書には、この時期、スペイン船に対する海賊活動で頭角を現しつつあったフランシス・ドレークへの献呈文が付されている点からも、イギリスが対外政策において強硬的であるべきとする主張は明確だ。この Cotton が書く詩の中で、ヤエルの奇跡は、強国との対立においても勝利は必ずイギリスの上に輝くという希望的観測を裏づけるものとして引き合いに出される。

神が、キシヨン河畔(で行軍中の)の信徒たちに目を向けられると、槌をもったヤエルの手が釘を打ち、  
そのおかげでイスラエルはシセラに打ち勝った。(Pt.2.1.36-40)

「シセラを退けた」とした *Averelle* の婉曲な表現に比べると、Cotton は暴力をより具体的に描写し、ヤエルの行動があなたもイスラエルの戦闘員としての務めであったかのように示す。なお Cotton は同作品で、『士師記』の別のエピソードを語る箇所でも、「天幕でヤエルが釘を深く打ちこんだ」ことに再び思いを馳せている (Pt.5

36-40)。シセラの頭蓋に釘を打ち込むという決定的瞬間に焦点をしばらく、殺害の実行者であるヤエルの姿を印象づける。

Cottonは、同一五九六年に『不貫の甲冑』(*An Armour of Proofe*)という詩集も発表し、そこでは、ハプスブルクの覇権に相対するエリザベス一世の姿をヤエルに擬えている。

御意のままに働くわれらの女王に神のご加護を。ヤエルのごとく、あなたの敵に強烈な痛手を与えたその人に。われらの慈悲深き女王に、何者にも勝るご加護を。彼女は独りで猛獣と対決しているのだから。

(1.483-86)

アルマダの海戦以後もスペインとの敵対関係はその後数年にわたって膠着し、その間、危機再来の懸念は絶えなかった。とりわけ一五九九年は、スペインの船団がドーバー沖を襲来するらしいとの風説が流布し、国内が不穏に包まれていた(Shapiro)。Cottonの作品は、対外政策に人々の関心が集まり防衛問題への意識が高まっていた、そのような時期に綴られたものであることを念頭に置いて読む必要がある。

一七世紀に入り、George Sandysが聖書中の詩歌を抄訳した*A Paraphrase Upon the Divine Poems* (1638)にも、戦士としてのヤエルの姿が描かれている。デボラの賛歌に相当する韻文には、「イスラエルの城砦が屈したその時、ヤエルが、かの恐るべき女が力を持った。豪胆な女である」と記されている。スチュアート朝末期にあっても、やはりヤエルはイスラエルの危機に即応して立ち上がる戦士として捉えられている。それと同時に「恐るべ

き女」(That Virago)や、「豪胆」(bold of heart)といった形容から、女性の身でありながら驚くべき破壊力をもった脅威的な存在として捉える向きがみられる。

### 三、脅威への警戒を促す事例として

「女性論争」におけるヤエルの扱いが二極化しているという現象があったように、イングランドの国威発揚的な詩文がヤエルを勇士として奉る一方で、彼女の存在に消極的な意味合いを読み出そうとする文献も認められる。以下数点の事例で、『士師記』第五章は、デボラとヤエルの立てた勲功として読まれるかわりに、シセラの過失として言及されている。武人の惨めな最期を悼み、そこから何某かの教訓を得るという主旨に語りの力点が移されているのだ。

その顕著な例が、Thomas Beard作『天罰の劇場』(*The Theatre of God's Judgment*, 1579)である。急進派ピューリタンのBeardは、グラマースクールの教師を務めていた時代には、後に共和政を率いるクロムウェルを指導したことも知られ、その思想は本作品が掲げる反劇場論にも明らかだ。Beardは、演技という行為が、人の目を欺くという点において本質的に悪しきものと訴え、その罪深い仕業の害を被った者としてシセラの名に言及する。

この男は信じて頼った者により殺されたのである。かくも猛々しい戦士が、女(デボラ)の率いる戦に屈し、さらに女(ヤエル)の手で死へと追いやられた。(BK1 Ch.11)

Beard は、Averille や Cotton のようにデボラとヤエルの榮譽を称えることをしない。彼が関心を寄せるのは、敗北者となったシセラである。勇将の命が、たった二人の女性の手によって断たれてしまったという事件の異例性を強調しているところに、本来ならば女性にこれを成し遂げる力が備わるはずはないとする視座が垣間見える。この奇跡的な逆転を実現したのが、他ならぬヤエルによる偽りの歓待である。

Beard はヤエルに懐疑的な眼差しを向けている。周辺の箇所でも、「シセラを憎悪する」(who hating him) という句を添え、この殺害がまるで私怨に因るものであったかのよう描く。このような叙述は、神命を帯びた誉れ高い女性としてヤエルを提示してきた伝統とは、一線を画すものである。ヤエルは、シセラを欺き陥れた悪役であるばかりか未知の人物をうわべだけで判断し、容易に信用せぬよう警戒を呼びかける為の素材となっている。

Gervase Markham の『親愛なる人々の涙』(*The Tears of the Beloved*, 1600) もまた、些細な過失が致命的な結果を招きうる恐ろしさについて警戒を促しながら、シセラとヤエルのエピソードにふれている。ここでも話題の中心となるのは、殺人をおこなったヤエルではなく、その惨劇を招いた睡魔である。Markham は、うたた寝の隙を衝かれて命を落とした人物を列挙する。

眠りがもとで失われたものをあれこれ挙げてみよう。サムソンは眠っている間に、その偉大な力を失った。サウル王の息子は眠っていた為に王国を維持しそこなった。シセラが眠っている間に、ヤエルは容赦なく彼を斬った

この記述も、殺されたシセラに同情的である。同様の例として言及されている面々と違い、シセラは聖書の文脈中ではあくまで征服されるべき異教徒であるにも関わらず、サムソンやサウル王の子息と同列に扱われている。むしろシセラの物語は、読者の憐れを誘い、かつ同轍を踏むことなきよう記憶されるにふさわしい教訓として提示されている。『士師記』第四、五章は、このように新たな観点から語り直されていく。本エピソードを、ヤエルの功績ではなく、シセラを襲った災難として描き、人の不意を打つ脅威に対する警戒を促す。こうしてヤエルの行動に対する見解は曖昧さを増していく。

さらにはヤエルを、純朴なシセラに不運な最期を報いた悪者として描く向きも認められる。Robert Whitehall は一七世紀後半に、以下は、「女傑」と題する韻文である。（『The Heroine? Exastichon heron, 1677』）

意識の遠のいたシセラは眠りに囚われた。將軍の疲労は重く深いヤエルは己の性を超えて、彼を打ち殺した。男の脳天には釘がささり、特別な寝台に横たえられることもない。女性たちは嫌悪するものを前にしていても優しげであり、相手を襲う時には、仇討ちの一発を重く振り下ろす

Whitehall もまた、シセラに不幸をもたらした元凶としてヤエルを話題にする。のみならず、その手口がいかに狡猾で容赦ないものであったかを強調している。以上のように、教訓的な文脈で、ヤエル像は未然に回避されるべき脅威の比喩として語られている。彼女は、男性の弱みを衝き悲劇的な死に導いた人物として語られる。



#### 四、寓意像となるヤエル

George Wither の『ブリテンの備忘録』(*Britain's Remembrancer*, 1628) は、一六二五年の疫病流行を祈念して書かれた長編詩である。預言者の声を模した語りによる詩作を得意とした Wither は、本作においても、ロンドンを襲った惨禍を宗教的な受難と捉え、いかに苦境に立ち向かうべきかを説く。次の引用箇所は、熱狂的な信徒が神の意思の実現を急ぐあまり、つい倫理に悖る手段に頼ってしまいがちなことを諷める。詩人によれば、そのような人々は、

客をもてなすべき場面においてヤエルさながらに（中略）、食卓をそのまま畏に変える。（この上なく協力的であるような態で）相手から警戒をもたれていない時に、命取りとなる凶器を構えてしまおう（Canto 6, 1.365-400）

宗教的なモチーフを使っているという限りにおいては、女性論争での、ないしは女王称揚を目的として書かれた作品に似てもいるが、この詩はヤエルの扱い方において、既に挙げたものと一線を画している。前掲の事例でみられたような、本エピソードに登場する人物や、ヤエルの行動について道徳的な価値を論じたり、あるいは物語そのものから何らかの真理を得ようとしたりする姿勢は希薄である。それよりも Wither は、歓待の礼で敵の

目を欺いたヤエルの偽善を自明のものとし、人が道を誤って罪深い行動に手を染めてしまう様子を描き出す為の喩えとしている。このようにヤエルの名が言及されても、その人物像はもはや議論的とならず、むしろ叙述に彩りを添え、文意を理解し易いようにするための便宜として用いられるというケースも、初近代において少なからず認められる。

一六世紀末イギリスでは、多くの文人たちが自らの才能を披露する試金石として、警句詩 (epigram) や格言詩 (aphorism) の執筆を試みている。いずれも十行を超えない短詩形の中で、凝縮された内容が語られる。本来は墓碑に刻まれる銘として、後世の人々に有益な言葉を書き残すことを目的としていた為、簡潔でありながら、読み手の記憶に残るようなものでなくてはならない (Hudson)。少ない語数で凝縮された内容を語り、かつ印象的な表現をすることが要求される、そのような様式においては、当然ながら、ひとつひとつの言葉に負わされる情報の密度も高くなる。このジャンルにおいて、ヤエルの名が選ばれていることは注目に値する。

また、警句詩の作品で人名が組上りのぼる場合、その人物について多くの読者が共有するイメージが確立していることも重要である。そして、初近代イギリスの警句文学で、ヤエル像は頻繁に活用されているのである。彼女は、シセラの死を招いた、「油断」や「快樂」といった抽象概念を表す像とされていく。

次にあげる二つの例では、ヤエルは快樂を喚起する表象型として利用されている。Thomas Bancroft は、『警句碑文書』 (*Two Bookes of Epigrammes, and Epitaphs*, 1639) に収められた「浮世の享樂」 (“The Worlds Entertainment”) という題の六行詩で次のように述べる。

この世はまさしく、天幕の内に居るヤエルに似て、食べさせたり、布で覆ったりの饗応を尽くしてくれるので、こちらはまどろんで長々と横たわる。しかし深々と寝入った頃、この頭蓋も心臓も、深々と地面に打ちつけられ、まったく取り返しのできないことになる (105)

浮世で得られる快樂がいかに儂いものであり、安穩と身を任せていると、隙を衝かれ致命的な痛手をこうむることすらある、と Bancroft は忠告している。「天幕の内に居るヤエル」は、この「危険」を視覚化するものである。ヤエルの姿は、直喩で「浮世」そのものの在りようと結びつけられ、あたかも具象化された「浮世」そのものが悪女の姿となって、虎視眈々と標的の隙を狙っているかのようなイメージを呈する。

このように短詩句のジャンルにおいて、ヤエルはその功績や戦略が話題にされることはなく、もはや誘惑や快樂を想起させる表象型としてほぼ固定されている。彼女は、表向きは従順にふるまい、もてなしの食事を運んでくる女性に似た存在こそ、計り知れぬ悪意が潜んでいると警告する文に寓意像として用いられている。

Francis Quarles の『神聖なる心象』(*Divine Fancies*, 1632) は、処世の心がけを四く五行の韻文にまとめた金言集である。そのうちの一作品で Quarles が提示するヤエル像は、極度に抽象化されている。

俗世で得られる歡樂は、まるでヤエルのもてなしのようだ。その左手は乳を差し出しながら、右手は槌を携えている (95, Book III)

この叙述が、ヤエルの名を使い、女性の二面性を提示しようとしているのは明らかである。そして、そのうち魅力的な面によって人の判断を誤らせ、もう一面にある悪意でもって破滅へ導くという一連のイメージが、左右の手に掲げた食物と凶器のふたつをとおして描かれている。

Samuel Speed の「繁栄に（ついで）」（“On prosperity”『敬神の牢』*Prison Pietie*, 1677）と題した格言詩でも、ヤエル像が用いられている。盛者必衰の理を説く詩の中で、ヤエルは虚栄の似姿となる。

ちようどヤエルが高貴な皿で差し出したもののように、贅沢な望みを満たすもののように見えながら、締めくくりに好色な「肉欲」が顔を出すと、死の釘が悲惨な結末を示し、最後の審判での惨めな取り調べが待つ道へと、容赦なく導く。このように「繁栄」は二度、裏切るのだ。始めはそのかすような笑みでもって、次に最後のとどめにおいて

## 五、結

ここまで、初近代イギリスの文学作品群にみられるヤエル像の受容状況を概観してきた。『士師記』に描かれたイスラエルの救済者というヤエルの姿が、ある文脈では、力行使する勇者として称えられる一方、別の文脈では、警戒すべき狡猾な女性として、さらに時として、悪意を潜ませた危険な対象の寓意として描かれているのが確認できた。本論では、ヤエル受容の系譜を見出すという意味も込めて、この女性像の利用状況を類型化しな

がら議論することに努めたが、今後はここで示した分類の枠に収まらないような事例についても検証しつつ、ここで注目してきたヤエル像をめぐる不透明性が、シセラに彼女が与えた饗応の場で供したと伝えられる食物、つまり“a lordly dish of butter”のイメージに凝集されていったという見通しにつなげていきたいと考えている。

註

(1) 犯罪者である伴侶に忠誠を尽くす女性が、裁判にかかわる法曹人に近づき、その目を欺いて目的を遂げようとするという筋から、この数年後に戯曲化され興行的な成功を収める『検察側の証人』（一九二五年）を彷彿とさせる。また同時に、女性登場人物が男性の傍らで、その身が危険に晒されていることを仄めかす物語を聞かせながら殺害に及ぶというスリリングな結末は、一九三四年の短編小説『うぐいす荘』（*Philonel Cottage*）と相通するものがある。Janet Morgan の評伝によると、一九四〇年代末のクリステイは、このように過去に執筆した作品を、ラジオドラマや舞台の台本用に書き換える仕事を多く手がけていたとあるから、先行作品との重複点は、執筆時期の特徴と考えられる。

(2) 尚、ヤエル伝説というモチーフも、クリステイが以前の作品に採り入れたものである。デビュー間もない一九二〇年代に、彼女はこのエピソードをモチーフとした短編小説『ケ二人の妻』をイタリヤの雑誌に寄稿している。その題名がヤエルを「ケ二人、ヘベルの妻」として説明する『土師記』の一節（二二）から取られていることからわかるように、既にヤエル像を自らの創作に利用しようとする意欲は明らかだ。この作品は、舞台をポーア戦争末期の南アフリカに設定されている。傭兵としてトランスバール側で戦い敗走中のプロイセン人がある大農園に逃げ込むと、今はその農園主の妻となっているが、かつて第一次大戦中の激戦地で、ふとした経緯から主人公に乳飲み子を殺された女性と遭遇し、結末には殺されるという筋である。

(3) なお、この数値から聖書の翻訳（完訳、抄訳）一三件は除外している。

(4) Broughton は、文献学者として古典語全般に通じ、その碩学ぶりは大陸においても名を知られる文献学者であっ

た。しかし並外れて厳格な学究精神ゆえに狹狭な人とははかられ、欽定訳聖書（一六一一年）の編纂では委員の役から外されたという談が伝わっている。

#### 引用文献

- Anon. *The Deceit of all Women*. London, 1568. *EEBO*. Web. December 2018.
- Averille, William. *A Mervallious Combat of Contradictories*. London, 1588. *EEBO*. Web. December 2018.
- Baneroft, Thomas. *Two Bookes of Epigrammes, and Epitaphs*. London, 1639. *EEBO*. Web. December 2018.
- Bateman, Stephen. *The Travayled Pilgrim*. London, 1569. *EEBO*. Web. December 2018.
- Benson, Pamela J. *Texts from the Querelle, 1521-1615*. Surrey: Ashgate Publishing, 2006.
- Bible: Authorized King James Version*. Oxford: Oxford UP, 2008.
- Blessing, Carol. "Elizabeth I as Deborah the Judge: Exceptional Women of Power." *Goddesses and Queens*: : *The Iconography of Elizabeth*. Ed. Annaliese Connolly and Lisa Hopkins. Manchester: Manchester UP, 2007.
- Byatt, A. S. *Elementals*. NY: Chatto & Windus, 1998.
- Christie, Agatha. *The Lost Plays*. BBC Physical audio, 2016. CD.
- Cotton, Roger. *An Armour of Prooffe*. London, 1596. *EEBO*. Web. December 2018.
- . *A Spiritual Song*. London, 1596. *EEBO*. Web. December 2018.
- Hudson, Hoyt Hopewell. *The Epigram in the English Renaissance*. NY: Octagon Books, 1966.
- Lydgate, John. *Fall of Princes*. London, 1494. *EEBO*. Web. December 2018.
- Markham, Gertrude. *The Tears of the Beloved*. London, 1600. *EEBO*. Web. December 2018.
- McLaren, A. N. *Political Culture in the Reign of Elizabeth I: Queen and Common wealth, 1558-1585*. Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Morgan, J. *Agatha Christie, A Biography*. London: Harper Collins, 1984.

- Quarles, Francis. *Divine Fancies*. London, 1632. *EEBO*. Web. December 2018.
- Walsham, Alexandra. “‘A Very Deborah?’ They Myth of Elizabeth I as a Providential Monarch.” *The Myth of Elizabeth*. Ed Susan Doran and Thomas S. Freeman. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2003.
- Whitehall, Robert. *Exstichon Hieron*. London, 1677. *EEBO*. Web. December 2018.
- Wither, George. *Britain's Remembrancer*. London, 1628. *EEBO*. Web. December 2018.
- Pyrré, C. *The Praise and Dispraise of Women*. London, 1569. *EEBO*. Web. December 2018.
- Sandys, George. *A Paraphrase Upon the Divine Poems*. London, 1638. *EEBO*. Web. December 2018.
- Shapiro, James. *A Year in the Life of Shakespeare*. 1599. London: Faber & Faber, 2005.
- Speed, Samuel. “On Prosperity.” *Prison Pietie*. London, 1677. *EEBO*. Web. December 2018.